

## I 企画展「博士の愛した中国陶磁」記念講演会「東部ユーラシアの中の日本—文物の交流に見る」

2019年2月10日（日）に、早稲田大学會津八一記念博物館開館20周年・横浜ユーラシア文化館開館15周年記念企画「博士の愛した中国陶磁—美と技の5000年」展の講演会として、「東部ユーラシアの中の日本—文物の交流に見る」（主催：横浜ユーラシア文化館・早稲田大学會津八一記念博物館、後援：関東学院大学）をKGU 関内メディアセンターで開催した。ここにその講演録を収録する。なお、講師の了解をえて、本紀要編集担当者が編集した。

### 講演 1

#### 平城京の人々が求めた海外文物—新羅文物の伝来経路

講師 李 成市 \*

私は横浜在住67年で、生後1か月ぐらいして両親が名古屋から横浜に移り住みまして、おそらく今日の関係者のなかではもっとも横浜市にゆかり深い人間だと思っています。たとえば、森鷗外が作詞した『横浜市歌』をご存じですか。この『横浜市歌』という歌を小学校の6年間、行事のたびに歌いまして、後日、森鷗外の作詞だと知って驚きました。「わが日の本は島国の……」という歌詞だったかと思います。

それから、本日は横浜市の歴史博物館館長の鈴木靖民先生とこの場に立たせていただいておりますが、先ほど上山館長からご紹介ありましたように、私はじつは学部3年生のときから國學院大学の鈴木先生の授業に出させてもらっていました。早稲田大学という大学はまったく無責任な大学で、私が「朝鮮古代史を勉強したい」と言ったら、「あなたの教育はできないから勝手に勉強してください」と言われて、学会に出席したときに鈴木靖民先生をご紹介されて、学部の3年からずっと鈴木先生にご指導いただきました。

鈴木先生は当時30歳そこそこでしたが、もう専任講師になられたところでした。私が鈴木先生をたいへん尊敬しておりますのは、今日のテーマにも関

わりますが、当時は古代の対外関係というと、中国と日本の関係ばかりを扱うわけです。それで当時、たいへん有名な中央大学の森克己という先生と鈴木先生との間で論争がありました。森先生は「新羅と日本との関係は、唐と日本との関係を補完する、補う関係である」と述べていました。遣唐使の研究の第一人者がそういうこと主張していたのですが、若き日の鈴木先生は果敢にも、「そういう見方はよろしくないんじゃないか」と反論された。「道徳的によろしくない」ということではなく、「事実としてよろしくない」ということです。

鈴木先生は「新羅と古代日本との関係は日唐間の補完関係ではなく、それ自体に独自の関係がある」という論文を発表して、当時大家であった森先生に論争を挑まれました。お歳で言うとお二人は20年か30年の開きがありましたかね。論文を読むとおもしろいですが、森先生が鈴木先生に対して「小僧扱い」であることが、行間ににじみ出ています。反論、再批判を併せて二往復ぐらいされたのでしょうか。いま見ても完全に若き日の鈴木先生の学説が優っているわけですが、私はそういう鈴木先生の背中を見ながら研究を続けてきました。

本日みなさんのお手許に配りました資料に、正倉院のフェルトの敷物、カーペットのようなものの角に、タグのように縫い付けられている文字の写真があります。1981年に、昭和天皇80歳のお祝いで、上野の国立博物館で正倉院展がありました。毎年10月末から11月初めの2週間、奈良国立博物館で展示がありますが、昭和天皇80歳のお祝いとし

\*Lee Sungsi 早稲田大学文学部教授

て、国民にありがたくも上野で展示するということになったわけです。その1981年の正倉院展を、「李君、一緒に見に行こう。いいものが出ているらしいよ」と鈴木先生から誘われて行きました。

そのときこの数物の端に付いているこの文字を見て、鈴木先生から「李君、これ、どう読むんだろうね。おそらく新羅の言葉で書いてあるんでしょうね」ということで宿題のように与えられて、やがてそれを1冊の本にいたしました<sup>(1)</sup>。たいへん思い出深いものです。

鈴木先生からは、長いあいだ学部や大学院の授業も受けましたが、やはり大事なのは展覧会で実物を見るとか、日本国内だけではなく、韓国や中国の発掘現場に連れて行っていただき、現場に行って直接ものを見るということも教えていただきました。韓国にも20年近く一緒に行って、発掘現場や史跡を見て歩くなど、そういうことを通じて私は東アジア古代史の研究をするようになりました。

本日の記念講演の大きなタイトルが「東部ユーラシアの中の日本——文物の交流に見る」ということです。おそらく鈴木先生は、いかなる関係のなかでユーラシア大陸のさまざまな文物が日本にやってきたのかという大きなお話をされると思います。私は鈴木先生の大きなお話の前座として、もう少し具体的に、ユーラシア大陸から日本列島にものが来るときに、いったい誰がどのように日本列島に海外の文物を持ち込んだのか、運び入れたのか。どのような人がそれを享受したのか。こうしたことを具体的に知ることはできないか。このようなことを長いことやってまいりましたので、それについて、これまで学会で知られなかった確かな事実も含めて申し上げたいと思います。

タイトルは「平城京の人々が求めた海外文物——新羅文物の伝来経路」と掲げました。さまざまなものが日本列島に渡ってきたわけですが、ここでは正倉院の宝物を取り上げたいと思います。正倉院の宝物は、みなさんご承知のようにいわゆる「勅封」と

言われていて、勝手に開けて出したり入れたりすることはできません。ものを出し入れしたときには記録が残ります。ときどきの権力者が勝手に持ち出したり、たとえば足利義満、それから信長も秀吉も勝手に香木を削ったりしている記録が残っていますが、そういう記録がたどれます。そのようなこともあって正倉院の宝物が舶来品としてはっきりしているものですから、それらを事例に、まずはそれがどこからどのように日本にもたらされたのか、これを記録に基づいて考えてみたいと思います。

2番目に、それらは新羅の使者がもたらしたのですが、どのような文物があったのか。新羅の使者がいったいどんなものを持ってきたのか。いつ、どうやって、何を持ってきたのか。これを2番目にお話ししたいと思います。

3番目には、新羅との交易は活発に行われたと言われていますが、いったいどのような方法で行われたのか。これも具体的に推測する資料がありますので、これについてもお話ししたいと思います。

4番目に、新羅との交易にはどのような意味があるのか。「どのような意味があるのか」と聞くと、新羅はさまざまなものを諸地域から入手して日本に商業活動として持ってきたのであって、あいだに新羅商人が介在して——非常に安っぽい言葉ですが、「お金もうけのために持ってきたんでしょう。商人の商業活動でしょう」ということを多くの人は言ってきました。私は、このような見方はまったく歴史感覚のない、通俗的な、誰でも考えられる、極めてチープな考えだと思います。古代に商人がブローカーのようにやってきて、「これを買いませんか」とか、そんなことがあり得るのだろうか。

基本的には、近代と近代以前とではものの見方や価値観がまったく違うわけですから、日常のものの考え方やシステムがまったく違います。先ほど川尻秋生先生が、私の研究のことを紹介して下さりましたが、もう少し夜郎自大言う、多くの前近代の歴史研究者、特に古代史研究者は、近代と近代以前と

(1) 李 成市『東アジアの王権と交易—正倉院の宝物が来たもうひとつの道』青木書店、1997年。

の違いを区別しない人が多い。近代とは極めて特殊な時代です。ですからマルクスが一所懸命に「近代資本主義というのはいかに人類史にとって大きい意味があるのか」ということを『資本論』のなかで詳細にその構造と思想を述べたのだと思っています。そういうことがまったくわからないで、「近代も現代も古代も一緒だ」といった考え方は、私の取らないところであります。

## 1 正倉院の新羅文物

ただいま四つのことを申し上げましたが、最初に、正倉院の宝物はどこからどのようにもたらされたのかについてお話しします。この問題につきましては、従来は、遣唐使によって、唐との関係のなかで正倉院の文物ももたらされたのだらうと安易に考えられていました。しかし、そうではなくて、意外と新羅あるいは新羅の北にあった渤海という国からもたらされたものもずいぶんあります。そのことを最初に指摘したのは、鈴木先生です。具体的に調べてみると、唐からもたらされたというよりは、これは新羅の文物ではないかということを鈴木先生がいち早く指摘されました。先ほども申し上げました森克己先生は日本と唐との関係の性格づけをなさった方ですが、いまだに森克己説をひきずって唐からもたらされたと思っている研究者が大半だと思います。

鈴木先生が1980年代から指摘されていることですが、正倉院の文物を見ると、だいたい三つの根拠で新羅からもたらされたものがあるということです。一つは名前からわかる。「新羅琴」とか「新羅羊脂」、これは薬用にも使います。それから「新羅楊家上墨」と書いてある墨があります。からすみという食べ物がありますが、からすみのような形をした墨がありまして、現代風に言うと「メイド・イン・新羅」と書いてあるのですから新羅のものだと考えられる。このように名称からわかるものがあります。

2番目に、新羅の都、慶州にあった雁鴨池という

宮苑池の出土遺物からわかることがあります。王宮の東北の場所に現在「雁鴨池」と呼ばれる池があります。1976年に発掘した結果、ここから1万5,000点ぐらい新羅の遺物が出土しました。そこには正倉院とそっくりのものがある。とりわけ銅と錫・鉛の合金で製作された食器類です。黄金色をした食器が正倉院にたくさんありますが、それとまったく同じものが雁鴨池から出てきたわけです。そういったものは正倉院にたくさんあります。正倉院には未使用の碗や皿、スプーンなど、なかには結わえたまま荷を解いていないものが残っています。それと同じものが新羅の都から出てくることによって推測されるわけです。

それから3番目に古文書が見出されたことによって、新羅の物品であるとわかることがあります。たとえばお椀のあいだから新羅の文書が出てきた。あるいはお経の帙を開けてみたら新羅の古文書が出てきた。そういうことから新羅製のものであるとわかる。お経をくるんだものだけ来るわけではありませんから、お経も新羅から来たことがわかります。このようなことで、正倉院に新羅の文物があるということは、次第にわかってきたわけです。

## 2 「買新羅物解」にみられる新羅招来の文物

主題の2番目に行きます。これが本日の大きなテーマでもあります。資料の六曲の屏風の画像、「鳥毛立女屏風」(図1)をご覧ください。この屏風の裏貼りからはがれてきた文書が現在30通ぐらい残っていますが、X線を当ててみると、屏風の台紙自体にも同じ文書がある。取り出せないままある。この屏風では、樹木の下に美人が立っていたり座っていたりするところが描かれています。これは唐からもたらされたと考えられていた時もありますが、この女性の服には茶色の山鳥の羽が貼られていて、この山鳥は日本の山鳥なので、この屏風はメイド・イン・ジャパンであることがわかっております。それから台紙も、752年に使用された「買新羅物解」

という古文書が貼り付けられていたわけですから、メイド・イン・ジャパンであることは間違いのないわけです。

この文書は何かと言いますと、申請日時が天平勝宝4(752)年6月中旬から7月上旬。現在発見されているものを見ますと、6月15日から7月8日までに、大蔵省ないしは天皇の財政を司るお役所である内蔵寮に、五位以上の貴族が新羅の物品を買い取りたいと申し出た売買申請文書です。新羅の物品を列挙したあとに、その新羅の物品の代価としての絹製品が記されています。その絹製品の代表的なものは、絹綿(きぬわた)、絹糸、紵(あしきぬ)、絹の4種類です。

代価としてもっとも多いのは絹綿です。じつは日本のシルクの質はたいへん良くて、おそらく新羅の文物を持ち込んだ人びとは、良質な絹製品を手に入れたかったのだと思います。新羅では日本の絹製品をどうしたかという、おそらく唐に持っていったのだと考えられます。国際的な通貨と考えてもいいと思います。近世では日本の銀が国際通貨になりますが、当時は日本の絹製品が国際通貨として珍重されたのだと思います。

こちらの申請文書を一例ご覧いただきますと(図2)、まず「金」とあります。これは金のインゴット、金の延べ棒が欲しいということです。それから「蘇芳」。これは染料です。そして小さな鏡。合わせて3種が欲しい。「直物」というのは代価のことです。

代価として絹綿610斤とあります。この申請文書をいつ出したかという、天平勝宝4年6月15日です。こういう申請の日付が書いてあって、誰が何を求めて申請したのか。基本的な文書形式はこうなっています。こうした申請文書が、切断されて不完全なものも含めて、30数通あるということです。あとでゆっくりご覧いただければと思います。

資料の最初に戻りますと、新羅の文物のことを「新羅物」や「念物」と言ったり、書いたりしております。列挙して、代価は「価直」とか「直」とか「価」などという文字で、支払うべき製品名が書いてある。さらに代価としての絹製品の分量および提出年月日、提出者の名が書いてあります。こうした申請文書が残されているわけです。

この買新羅物解の研究をなさった東野治之さんという著名な研究者が、『正倉院文書と木簡の研究』<sup>(2)</sup>のなかで、あるときまでに判明した買新羅物解の申請文書の物品を全部挙げた表を作られました。それをみますと、最初に14種の香料があります。「薫陸香」とか「青木香」とか「丁香」、「沈香」、「藿香(かっこう)」、「零陵香」などとあります。これらは薬品としても使われます。資料に書きましたが、すべて中国南部、西部、東南アジア、インド、アラビア、こういう朝鮮半島には産出しない香料を新羅使節が持ってきて、日本の貴族たちが買い付けたということです。



図1 鳥毛立女屏風 正倉院宝物

(2) 東野治之『正倉院文書と木簡の研究』塙書房 1977年

薬物としては12点挙がっています。正倉院の薬物の研究があって、50数種がいま明らかになっていますが、それらの薬物が新羅の使者を通して日本にもたらされたことがわかるおもしろい資料です。顔料は八つほど挙がっています。これもたいへん興味深いものです。顔料の後ろから2番目に「雌黄（しおう）」がありますが、これは現代風に言うと消しゴムと言いますか、お経を書いた際に誤字があったときに、これを墨の上に塗って書き換えるときに使った、文字の誤りを消す顔料です。「蘇芳」という染料は、赤紅色といったらいいでしょうか、当時絹を染めたりするときに利用されたものです。それから金属。これは金と鉄精が現在のところ確認されています。

「  
金 蘇芳 小鏡  
合三種  
直物 綿六百十斤  
天平勝寶四年六月十五日知家事資人大初位上栗前首□□  
」  
（『統修後集』43巻、古25四四）

図2 買新羅物解釈文 李成市『東アジアの王権と交易—正倉院の宝物が来たもうひとつの道』より

また器物・調度があります。「鏡」、「香炉」、「鏡」、「匙」、「盤」など、日常で使う食器類が出てまいります。「燭台」、「櫛」、「簪」、「牙笏」——威儀を正すもの、「氈」というカーペットも各種出てまいります。私は数日前から正倉院展の図録を見直していましたが、ここの物品はほぼ正倉院の文物のなかに出てきます。つまり現在、正倉院の宝物として入っているものは、新羅から入手したもののがかなりあるということです。

この図録は、先ほど言いました鈴木先生と見に行った1981年の昭和天皇80歳のお祝いのときの図録<sup>(3)</sup>です。それから「鳥毛立女屏風」の女性の絵が入っているのは、正倉院展40周年記念の図録<sup>(4)</sup>です。また去年は70周年記念の図録が出ました<sup>(5)</sup>。それを見ますと興味深いのは、何十周年記念という

図録には新羅の文物が極めて多い点で一致しています。どういう理由があるのかわかりません。後で時間があれば推測はお話しますが、この図録をご覧くださいますと、ここに載録されている物品が、ほぼ全て出てまいります。

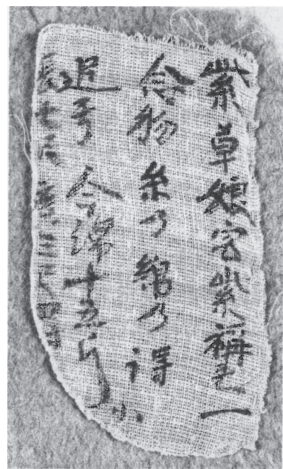
一つだけご覧に入れたと思いますが、申請文書に「花鏡」という物品名が出てきます。それはおそらくこのような鏡のことを花鏡と言うのではないかと思います。正倉院展では必ず一番前のページに出てまいります。花模様の鏡です（図3）。このようにさまざまな宝石がはめ込まれた鏡がありますが、それがおそらく花鏡に該当するのだろーと思います。



図3 八角鏡 平螺鈿花鳥背 正倉院宝物

### 3 新羅文物の伝来経路

3番目に、新羅の文物の伝来経路についてです。フェルトで作った敷物が50枚ぐらい正倉院に残っておりますが、そのなかの2枚に麻布の文書が付いていました。その2枚を紹介しますが、一つは紫色一色の敷物の右端にくっついていたものです。縦は240センチぐらいある敷物ですが、右上の裏側にタグのように縫い付けてあったわけです（図4布箋墨書）。図4 色氈上の布箋墨書 正倉院宝物



(3)『正倉院宝物 特別展』東京国立博物館編刊 1981年  
(4)『正倉院展 第40回』奈良国立博物館編刊 1988年  
(5)『正倉院展 第70回』奈良国立博物館編刊 2018年

これはいったい何かということですが、「紫草娘宅」——これは新羅の王族の家号、紫草娘宅という王族の家号を持っている人が、「代価として紫色の色氈を1枚」ということです。「念物」というのは新羅の言語で「欲するもの」、「希望するもの」という意味ですが、「希望するものは、糸でも絹綿でも得るように」ということです。この紫の敷物に対して、日本の絹糸か絹綿が欲しいというリクエストが書いてあったわけです。

もう一つのほうは、新羅の官僚は17ランクの官位を持っていたのですが、その12番目の官位である「韓舎」を持っている行巻という名の貴族が、「代価として花氈（模様の付いた敷物）を1枚、念物を得るように」ということです（図5 布箋墨書）。何もリクエストがない場合には絹綿をリクエストした。このような文書が氈に付いていたということです。



図5 花氈上の布箋墨書 正倉院宝物

この二つのタグ、敷物に付いていた文書は、日本側の「買新羅物解」のように何年何月とは書いていません。いつ書かれたのか、一つの手掛かりは、官位の「韓舎」です。それ以前この官位は、もともと「大舎」と書いておりました。「大」という字と「韓」という字の音は、韓国語の大きいという固有語に通じるので、これはイコールで使います。「韓舎」というのは7世紀まではなくて、8世紀から使うようになります。ですから8世紀以降のものだということがわかります。

それからこの文字の特徴は、「韓」という字と「舎」という字が、くっついて書いてあります。なんで接続したように書いてあるかということ、この字の由来はもともと「大舎」を「舎」と併せ文字で使っていたので、「大」を「韓」という字に変えても「舎」字をくっつけたんですね。

ここに、いたずら書きのある木簡がありますが、この木簡は先ほど申し上げた雁鴨池から1976年に出土した新羅の木簡です。この木簡には、「韓舎」を一字にした文字がいくつも書かれていますが、それらの右側に「天寶十一載」と書いてあります。「天寶十一載」というのは752年です。同じ文字を何度も書いてある木簡を習書木簡と呼びますが、「買新羅物解」と同じときに、新羅の官僚がおそらく新たに「韓舎」という地位に就いて、練習をたくさんしたのだと思います。この文字とタグの「韓舎」とはそっくりです。同一人物ではないかと思われるくらい酷似しています。

つまり何が言いたいかというと、752年にこの花氈は持ち込まれたといってもよい。同一時期に記された新羅木簡と全く同じ筆跡の文字が正倉院の新羅文物にあったということです。しかも「買新羅物解」と新羅の物品に付いていたリクエストが同じ形式で書かれているので、両者は対応するということになります。

#### 4 新羅と日本の政治と交易

最後のお話ですが、新羅と日本とのあいだでたいへん興味深い交流がありました。668年に高句麗が滅びますと、それから110年のあいだに、新羅から日本に47回、日本から新羅に25回、合わせて70回ぐらいの往来がありました。こういうことはあまり歴史教育では教えないと思うんですね。私にとって遣唐使などは15回一方的に日本から行くぐらいで、その15回にいったいどういう意味があるのかを詮索する以上に、もう少しこの60回の往来にどんな意味があったのかを考えたほうがいいと思います。

この110年を三つの時期に分けて考えるといいの

ですが、最初は 668 年から 696 年までです。新羅も日本も何を意図して交流したかという、新羅は唐と戦争したので唐が怖い。日本も白村江の戦で唐と戦ったので、新羅と唐が一緒に来たら怖い。ですから両方が互いに配慮しながら付き合った。そういう交流が 30 年間あって、このあいだ遣唐使は派遣されていません。

第 2 期は、697 年から 726 年まで、新羅から 10 回、日本から 10 回の往来があります。このときの特徴は、新羅の使者が来たら必ず平城京、都に入れる。そして必ず天皇に朝賀、儀礼をさせる。これが第 2 期の特徴です。

第 3 期は、732 年から 779 年までです。この時代は、いったいどういう性格があるかという、新羅の使節が大規模化します。100 人とか 200 人の規模でやってまいります。しかしながら日本は、博多湾で追い返す。「帰れ」ということで都まで入れない。こういう特徴が第 3 期にはあります。

しかしながら 752 年に、たいへん興味深いことが起こっております。「王子・金泰廉」を名乗る者の一行 700 人が博多湾にやってくる。そのうち 370 人を都に受け入れる。この金泰廉一行は孝謙天皇にお目通りがかなって、6 月 14 日に拝朝する。17 日には朝堂で饗宴を受ける。東大寺や大安寺に礼仏をする。このような一行でした。この一行が持ってきたものが「買新羅物解」で売買されたということです。

こうした事実が判明しているわけですが、これを果たしてどのように見るかということです。このとき大量の文物を新羅の使者が持ってきた。それをどのように評価するのか。その時代背景を考えてみました。

まず、この時代の特徴として重要なのは、新羅は渤海の軍事脅威に対抗するため、720 年代から 750 年代、日本と新羅は互いに反目しながらも、大規模な使者を新羅は日本へ派遣している事実です。日本側は「お前なんか帰れ」と追い払うけれども、どうも新羅の使者が持ってきたものについては、筑紫の港でいろいろ入手していたらしい。752 年には都に

まで入れている。このような外交のあり方について、この間の交通関係、一方で交易の隆盛と他方で政治的な冷却、軍事的な緊張をいったいどう考えたらいのか。

こういうことを言う人がいます。「いや、経済と政治は違うんだ。もうかればなんでもいいんだ。険悪な情勢と経済とは別なんだ」と言う人もいますが、私はそうは考えません。これは有名な文化人類学者のレヴィ＝ストロースという人が言っている言葉ですが、「交換とは平和的に解決された戦争であり、戦争とは交換が失敗に終わった結果である」。つまり交易と外交というのは裏腹な関係にあって、どちらも極めて政治的な行為であるということです。

新羅の大規模な使節派遣は、厳しい国際情勢下の戦略上の方策である。新羅にとっては対渤海への外交戦略上の保全策である。当時、渤海と日本の軍事的連携がありました。日本側としては、新羅使節がやって来ると、どういうメリットがあるのか。資料の 2 枚目の左下の図をご覧ください。新羅の貴族が物品を使節に任せて日本に持ち込む。日本側では大蔵省ないしは内蔵寮が、日本の貴族に新羅が持ってきた物品を頒布する。巨視的にみると両国においては、天皇と新羅王とのあいだで、日本の文物と新羅の文物を分配する関係がみてとれます。

分配するとどんな効果があるかという、最高権力者の権威が高まる。政治的な権力構造を互いに強化しあう関係にある。敵対的な共存関係とでも言いましょうか。このようなことが 8 世紀の半ばに行われていたのだらうということが、私の今日の話の主旨です。ですから、平和な時代の平和な交易ではなく、相互に緊張し反目しあいながらも互いに自己の権力を強化するために、こうした大規模な交易が国際的危機を背景に行われたのだらうということです。

少し時間が超過しました。お見せしたい画像もありましたが、それは後ほど時間がありましたらお見せしたいと思います。以上をもって終わりにさせていただきます。

## 横浜ユーラシア文化館 第8号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 8

2020年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

[www.eurasia.city.yokohama.jp/](http://www.eurasia.city.yokohama.jp/)

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 朝日オフセット印刷株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Asahi Offset printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2019

ISSN 2187-7734